
地図にない楽園

刑部 科

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地図にない楽園

【Nコード】

N5906M

【作者名】

刑部 科

【あらすじ】

前略。お母様。お元気ですか。

私は、魔界を侵略するのに飽きて異世界旅行に出た魔王様と、地球を観察に来た他星の宇宙人とクリスマスイブから一緒に暮らしています。

……だなんて年賀状に書いても夢オチと思われるのが関の山だろう。偽りの無い事実なのだが。

私と地球外生命体の『彼ら』の話。

初日の出は、宇宙人と魔王様とコタツでみかんを食べながら見ました。

1・元旦

新年。

初日の出は異世界トリップしてきた魔王と、異星間トリップしてきた宇宙人と一緒に見ました。

「……なんて人様の前で口に出したら、頭がおかしいかつまらない冗談と思われて終わりだよな」

目の前の皿の上で焼きたての餅が程よく冷めるのを待ちながら、そう呟いたのは私 榊^{さかき} 芙音^{ふおん}である。

私だつてこれが自分の身に起きたことでなく、人から聞いたことだつたら、間違いなく相手の正気を疑うだろう。そして、場合によっては病院で検査することをお勧めする。けれど、残念ながら当事者は私で、しかもどうやら病院にいつても解決しそうにない。紛れもない現実なのだった。過労による幻覚、あたりだつたらよかったのに……。

私はため息をついて床の一角に視線を投げた。年賀状が一枚落ちていた。

宛名は母のものだ。

昨夜、書くだけ書いたものの、投函をあきらめて放り出し、そして数時間経った今も床に放り出されたままになっている。

私は年賀状にこう書いていた。

「前略。お母様。お元気ですか。私は毎日釘バッドで素振り50回位なら余裕で出来そうなほど元気です。

（もしかするとその間手が滑ってナニかにぶつけてしまつかもしれませんが、犯罪者にはならぬよう気をつけますね）

そうそう、新年あけましておめでとございます。今年もよろし

くお願いします。

さて、私のほうの近況というと、クリスマスイブから二人の同居人と暮らし始めました。

同棲ではありませんので、お赤飯を炊くのは辞めてください。

同居人は、魔界を侵略するのに飽きて異世界旅行に出た魔王様と、地球を観察に来た他星の宇宙人というけつたいな組み合わせですが、今のところ世界の平和は脅かされることはなさそうです。

ご安心下さい。

それでは、お母様も、お体にお気をつけて。

釣った魚ならぬ、お父様にもたまには餌をあげてください。可愛い娘からのお願いです。

そのうち実家にも又、顔を出しますね。では。」

ここまで書いた。後は投函するだけだ。なのにその手がとまったのは、内容の余りの怪しさに我が事ながら目がうつろになったからだ。

さすがに、これはない。私のお茶目が発揮したちょっとバイオレンスな一言が無くとも、この上なく怪しい。

うな垂れながら餅を一口食む。 ああ、ぱりつとした海苔と餅とのコンビネーションはなぜこんなにうまいのだろう。

「でも、実際事実ですしね」

すっかり慣れた手つきで、自分の餅に海苔を巻きながらそう言ったのは、宇宙人やマシィータタロウだ。

こやつ、宇宙人の癖に名前の音だけ聞いたら日本人みたいである。実際、外に出る時は山下太郎と名乗っているらしい。

しかし、どう見ても彼は銀髪碧眼の非黄色人種な外見をしているので全然似合っていない。がっかりだ、太郎の癖に。

さらに、きらきら仕様の見た目一見氷の王子様のようなので、がっかり感倍增な感なのは否めない。

銀髪美形の王子さまなのに太郎。

昔、山田太郎と言う名の美少年の出てくる漫画があった気がするが、あれはあくまでフィクションだからよかったのだと思う。

それに、一応あの漫画の彼は黄色人種のようなだった。

この宇宙人は、同じタロウでも赤と銀が煌く特撮ウルトラ超人並みに違和感がぬぐえない。

そういえば、あれも宇宙人だったような？

なんだ、既に前例がひとつあった。方や現実、方や創作といえど前例は前例だ。それを思うとそこまで変、でもないのだろうか。

いやいや、でも。

自分の感覚が非日常に慣らされて日に日におかしくなっていくような気がした。

「初日の出を見てこたつでみかんを食べる魔王がいたっていいと思うが」

魔王ターナーカーサットウスィズキイはみかんを剥きながらそう言った。その手は既に熟練の手つき、すじ取りまで完璧だった。

この魔王、名前が非常に中途半端でもどかしい。田中か佐藤か鈴木かはつきりして頂きたいと何度思ったことが。

まるで売れない芸人の名前のような。

こちらは黒髪だがやはり碧眼。ヤマシイと同じく恐ろしく顔の作りはいい。思わず殴りかかりたくなるほどだ。 異論は認める。

変形しても美形なのかどうか、少し気になるのだが、暴力は良くないという認識は髪の毛の細さ程度には存在している。ゆえに、まだ変形するほど殴ったことはない。

私は平和主義者なのだ。

……せいぜい、ちょっとお仕置きに軽く拳を振るう程度。顔面を変形させるほどの強い暴力なんてとんでもない。

いずれにせよ、田中や佐藤、鈴木というイメージではないと思うの

は偏見だろうか。

「余り無いケースだから、信憑性が疑われてしまふんでしょう」

余り無いどころか、普通は一生縁が無いと思うんですが？

私の心のツツコミは感じとって頂けなかったようで、ヤマシイのその言葉にターナはそうか、とうなづいていた。

「確かにわたしが旅行に出たのは久方ぶりだ。3000万年くらい前だったか」

「あ、そんなものですか。僕なんかは寧ろ家にいることよりも船に乗っていることのほうが多いくらいですから、ちょうど反対ですね」

「船の外はずっと星の海なのだろう？ 飽きないか、その生活」

「寝ていることも多いですね。起きてる時はネットワークからダウンロードしてきた娯楽映像見たりとか。ネットワークに流出してきた他星系の動画も見ますよ。その星によって面白いと思うものが違ったりするから、楽しいめない時もあります。そこを言うところ、フオンの住んでいるこの地域で作られる娯楽映像は人気がありますよ。アニメですとか、ニコニコですとか、ユーチューブですとか。とりわけアニメがいいですね。アニメが」

「アニメにニコニコ動画にyoutubeかよ！・・・・・・いやだ、こんな宇宙人！」

私は額に手を当てて首を振った。

残念すぎる。しかも、折角美形なのにアニオタとか。

私自身もオタク気質にそれなりに溢れてはいるので人様を非難する資格はないのだが、それにしたって美形男子にちよつとくらい夢見たいのが乙女ってものだ。まあ、美少女フィギュアがほしいと言いたいだけましと判断しておくべきか。

「他星系にすら誇れる文化ですよ？ 大人気なんですから、あのコンテンツ」

「ああ、確かにあれは面白いな。初めてこの世界に来た時にあれを見つけてよかった。そうじゃなければ、危うく侵略するところだった」

しみじみと魔王様は物騒なことを仰った。

アニメ一つで世界が救われたなんて！

なんだか悲しくなる。

いや、喜ぶべきなのだろうが。アニメで世界が救われたというのなら。

「そうですか。そうならないで良かったです。あれはいいものですし。そうそう、気が変わってこの世界を侵略したくなっても、せめて僕が死んでからにして下さいね」

「お前の寿命はどれくらいだったか？」

「ええと、今ある冷凍睡眠と延命技術をあわせても精精数百年つて所ですから。一千年後くらいなら大丈夫じゃないですか？ フォンもその頃には余裕で墓の下でしょうし。確か、この星の人間の寿命は百年そこそこでしたよね、フォン？」

「そんなに短いものなのか。地球の人間とやらはしよばいな」

よしよし、と可哀想なものを見る目で頭を撫でられた。

手つきが優しいだけに腹立たしい。

「しよばいって言うな！」

私はぱしつと魔王ターナの手を振り払う。

ああ、今日も世界は平和だった。

魔界を侵略するのに飽きて異世界旅行に出た魔王様と、地球を観察に来た他星の宇宙人と。

去年のクリスマスイブに出会ってから、今日で丁度一週間目。

何故か私の家に転がり込んだ彼らはこのまま暫く居つく勢いで。

ご近所さんに見られたらどう言い訳しようか。

それを考えると、新年早々なのにちよっぴり鬱になりそうである。

「フォン？ お腹がすいて不機嫌なんですか？ ちょうど追加で焼

いたお餅も、もてる程度に冷めたようですよ。召し上がれ」

「ああ、そうだったのか。悪かった。遠慮なく食べ。砂糖醤油もあるぞ」

「きな粉も用意しておきましたから。足りなければもっとお餅も焼きましょう」

それでも彼らとの暮らしは不快ではなく。

「よし、食べる！・・・大根おろしも用意してくれる？」

「じゃあ、すつてきますね」

立ち上がる宇宙人やマシイの背中を、私は餅に食いつきながら見送った。

* * *

今年は次の瞬間ナニが起きてもおかしくない一年だ。

何せ、宇宙人と魔王が自分の家で暮らしているのだ。

同じ状況になった人間は、おそらくどこを探しても一人も居ないだろう。

そうそうあっても困る。

私が地球人類として、初めて遭遇したケースなのだ。

この先ですら、同じ状況になる人間が二度と出ない可能性がある。

「そう考えると、私って不幸なのか幸運なのかどっちなのかなあ」

何十億、何千億分の1の確立か、とてもレアなケースに立ち会えたのだから。

首を傾げる私に、ヤマシイが素っ頓狂な言葉を返してきた。

「え、復興と耕運機？ フォンは村おこしでも始めるんですか？」

「誰もそんなこと言っていないわ！」

私はヤマシイの高いところにある頭をぺしりと叩いた。

「フォンは激しいですねえ。姫初めがSMというのは余り僕の趣味ではないんですが」

などとバカなことをいう宇宙人との出会いはあんまり幸運そうじゃないが、不幸でもなさそうだ。

「そうだな。わたしもどちらかというとなかせるほうが得意だし」
「……こんな魔王に出会ったことは、もしかすると少し不幸かもしれない。」

ただ、二人とも美形ということで目の保養はできるからプラマイ0。

除夜の鐘で二人の煩悩を振り払ってやっていけばプラスまでもっていったかもしれないのに、惜しいことをしたものだ。

「バカなことを言ってる暇があったら、魔界と自分の星に帰れ！」

バカなことじゃなくて半分本気なんですが、というヤマシイの呟きと、半分どころか私は8割くらいは本気で言っているのだがというターナの呟きの両方を私は黙殺した。

「……そういえば、後で初詣でも行く？」

まだ不満そうに呟いている二人をスルーし続けた上で、私は提案した。

「別にいいですけど。人多そうですね」

「何を着ていけばいいか迷うな。下手なものを着るとフォンが怒る」

「あんな派手なマントを着て街中を闊歩したらなんのコスプレかと思いを疑うわ！」

「フォンはファッションに拘りがあるのだな。よし、後で監督してくれるか。初詣に行くこと自体は吝かでない」

「わかったわ……じゃ、後でみんなで一緒に行こうね」

平和で楽しい一年を過ごせるよう、祈りに。

加えて、私の貞操の無事も。

2・書初【前編】

新年開けて二日目といえば書初めだ。

宇宙人と魔王という地球外生命体の二人に日本の文化を体験してもらおうと、半紙と墨と硯と筆を用意した。

慣れない二人が墨を飛ばす可能性は高い。

被害を抑えるべく、新聞紙を床と机の上に引き出した方がいいのだが。

「ターナ！ 新聞紙、そっち広げてくれる？」

「新聞はこれでいいのか？」

「そちらはまだ新しいものですから、こちらを使った方がいいかもしれませんよ」

「ありがたい。ヤマシイ、それをこちらに渡してくれ」

「あ、これも使えそうですよ」

「両方共くれるか？」

「いいですよ、どうぞ」

「あ、ちよつと！ ターナ、踏んでる！ 私の本！」

「ああ、すまなかった」

「すいません、フォン。僕も踏んでいたようです。……角は折れてないようですが」

「気を付けてよ、二人ともー！」

でかい男二人と女一人（私のことだ）が動くには、2DKの部屋でも狭かった。

女ひとり暮らしとしては十分な広さ。

これで、家賃はとあるツテを利用できた為に破格の値段と、人が聞いたら絞め殺されてもおかしくないほど恵まれた部屋なのに。

書初を始めるのすら一苦労だった。

＊ ＊ ＊

「……こんなものかしら？」

漸く床と机の上を新聞で埋めることに成功する。

新聞紙を引くだけで数十分かかってしまった。お正月は有限なのに、時間がもったいないなあ、と思う。

これを後で片付けるのも正直面倒くさいのだが、始めてしまったからには仕方ない。

「じゃ、次。墨をすって」

私の指示に、ターナとヤマシイは揃って首をかしげた。

「墨をするとは？」

「どうすればいいんですか？」

渡した墨を二人はしげしげと見つめた。

「……この紙にこすりつけなければいいんじゃないのか？」

「大分粉っぽくなりそうですけど。いいんでしょうか」

「粉が飛んでもいいように、新聞紙を引いたのではないか？」

知能レベルはかなり高く、学習能力も高い二人だが、地球における知識は大分偏っており揃って変な所でぬけている。

「硯を用意したでしょう」

それを承知で全部を教えない私も私なのだが、二人がどういう発想をするのか少し興味があつた。

硯を指し示し、ヒントだけ与えてみた。

「硯、とはこの窪みのある石のようなものか」

「この中にこすり付ければいいんでしょうか。でも、そうするとこの紙はどう使えば……」

「この窪みに粉を溜めて、筆で紙にこすり付ければいいんじゃないのか？ 書初には筆も使うようだから」

「なるほど。しかし、この筆に粉が絡みますかね」

「……水でもいれればいいのか？」

「どうなんだ？ とほぼ完璧に近い答えをあげたターナ達に、

「だいたい合ってるわ」と私は頭を縦に振った。

うーん、これくらいなら聞かなくても想像できるか。

教えてくださいの言葉を密かに期待していた私としては残念である。

「水と一緒にその硯ですればいいのよ」

「出来上がった黒い水で、この紙に何かかけばいいのだな？ 何か書く行事なのだろう？」

「何を書きましょうか」

「新年の抱負とかなんだけど……そういえば、二人は文字は書けるの？」

日本の文字は読めるようだが、書けるかどうかは聞いていなかった。

「僕の星の文字なら、書けますけど。共通語以外でも、30ヶ国語くらいなら」

「わたしも、魔界の文字なら書けるのだが……そういえば、あれを人間が見ても大丈夫なのか？」

「……え、何。ヤバそうなことは御免よ！」

「……大丈夫だ、と言いたいが正直自信がないな。……魔界で使われる文字は、呪力を孕んだものだから」

「ジュリヨクって何？」

「……お前たちの世界の娯楽書でも、魔法という概念は出てきたかと思うが、それと似たようなものだ」

「端的に言っと？」

ターナは一瞬目を伏せ、すぐに顔を上げるとにやりと笑った。

「何か、起こる」

「何かって」

「さて、なあ。この世界にきてから、呪符はそういえば書いたことがなかったから、魔界と同じ効果が現れるのかどうか、威力はどの

程度なのかわからん」

「試してみます？ 『現在のポイント』を僕の持っている機械に保存しておけば、失敗しても少なくともその地点まで復元することはできますから」

何、そのWINDOWSのシステムの復元みたいな機能は……。呆けて口をあける私の目の前で二人はどんどん話を進めようとした。

「ふむ、やってみるか」

乗る姿勢を見せた魔王ターナを見て、私は二人を止めた。

「やめてちょうだい！」

何が起こるかわからないのに、そんなことさせられるか。答えは否だ。

「やるなら外にして！ 万一、その復元とやらも失敗したらどうするのー！」

「それもそうか。……それとも、その復元とやらは100%成功するものなのか？」

「98%って所ですね。ほとんど成功しますが、不測の事態も無いとは言いい切れませんし……そもそも、魔王の呪力というものを体験した事が無いので。未知の要素が入ることになりますから」

「やっぱり止めてくれるかしら？」

「そうだな、止めておこう。そうするとわたしは何を書けばいいのか迷うな」

私とて、何を書かせれば安全なのか迷う。

まさか、こんな罠があるとは思わなかった。

「僕も迷います。何語で書けばいいのか……そもそも、フォンに読めない物を書いてもつまらないでしょうしね」

それもそうだった。

ヤマシイの書く宇宙人の言葉。

間違いなく私には読めそうにない。

「……絵でも書くか？」

「それはいいですね。絵ならフォンもわかるでしょう?」

「……そうして」

なんとかまとまったようで、私はほっとしたようにため息をついた。

安堵の吐息は、すぐ様、怒声に取って代わるのだが。

3・書初【後編】

書初でまさかこんな如何わしい芸術が生まれるなんて予想だにできなかった。

「ちょっと、ヤマシイ！！何これ！ものすごく上手いのはいいけど、なんで私が素っ裸の絵なの！」

お子様にはちよつと見せられない、18禁仕様。所謂、春画というのじゃないだろうか、これは。

絵心を十二分に感じさせられるそれは物凄く上手い上、細部まで丁寧に書き込んである。

なんで筆でこんな絵が描けるのか。

「あああああ！！ターナも、なんてもの描いてるの！！」

ターナのほうも似たようなものだ。こちらは絵というよりは台詞の無い漫画。勿論成人指定がつくのは間違いない。

ヒロインは勿論、私である（デフォルメしてあるが、私にソックリだ）

「だいたい、なんであんだ達、私のおへその横にある痣を知ってるのよーーーー！！」

二人の前で脱いだことは無いはずなのに、二人揃って私を思わせる女性の腹には逆三角形の形をした痣がある。

その形の痣は勿論、私にもあるのだ。

二枚ともすぐに燃やしてやった。

あっけなく、灰になる。

書初めは古来、燃やして文字の上達を願うものだったと言っから、それは正しい作法だ。

そういったのに、残念そうに眉を垂れてため息をつく二人の急所

には、膝蹴りを仲良く食らわしてやった。

あんな危ないもの燃やさずにいられるか、なんて本音は口にしない。

書初め後の片付けはすべて二人にやらせた。

罰ゲームにすらならない程度で勘弁してやるなんて、私はなんて優しいのだろう。

力加減はちゃんとしている。

「もし、今夜以降、襲ってきたら本気で潰すからね？」

どこを、と言わなくても伝わったようだ。二人は勢い良くうなづいた。大変結構！

笑顔の私を見て、宇宙人と魔王の二人が顔色を真っ青にしたのは流石に大げさな反応だとは思っただが。

あんだ達、人類にとつての脅威の存在じゃないのか。

そういえば、地球外生命体の二人にも日本の法律は適用されるのだろうか？

ふと思いついて尋ねてみる。

「ねえ、あんだ達殺っちゃったら犯罪者になるのかしら、私」

「え、やる気満々ですか！ どうせなら、やらしい方のやるにしておきませんか。それなら僕は拒みませんし」

「……それを答えた時の反応が怖いから、わたしは黙秘しよう。しかし、ヤマシイの提案の方ならわたしも乗……」

皆まで言わずみぞおちに肘打ちを入れてやった。

よし、悪は滅ぼした。そうだよ、魔王っていうくらいだし、人間が滅ぼしても犯罪にはならないよね！

宇宙人はどうなんだろう？

宇宙人ヤマシイの顔をじーっと見つめていると、

「僕、用事を思い出しました。買出し行ってきました」

逃げやがったので追求はとりあえず諦めた。代わりに、買出し便乗注文する。

「じゃあ、期間限定のさるぼぼチップスよろしくね！」

夏まで限定の商品だが。

「わかりました、行ってきます！」

安請け合いと思いきや。

帰ってきた時、本当に彼の手に夏限定のはずのさるぼぼチップスがあったので、こいつは生かしておく価値があると思い直して、滅ぼすのはかんべんしてやった。

尚、不死身を唄う魔王様がなぜかまだ悶絶して床を這っているのだが、これはどうしたことだろうか。

4・三が日終了【前編】

「お正月らしい遊びをしよう!」

家の中でこもりきりだから、妙な煩惱など生まれるのだ。

そうだ。そうに違いない。

エネルギーが余ってるから、そんな所に思考が飛んでしまうのだ。これではいけない。

乙女の危機を感じた私は、二人に別の楽しみを教えることにした。お正月といえば、やっぱり!

必要な小道具の買出しに来たホームセンター内。

家から徒歩12分という微妙な距離にあるホームセンターは、まだお正月明けて三日目ということもあり、初売りセール目当ての客でそれなりにごった返している。

人ごみではぐれてしまうことを懸念したが、長身の二人は人よりも頭ひとつ近く抜きんでいるせいで見失うことはなさそうだった。長身というだけで人目を惹く。

それだけなら、良かった。

「で、何を買えばいいんでしょう?」

「コンビニよりも大きいな」

きよろきよろとフロアを見渡しながら歩く二人は異常に目立っていた。

身長が高い二人が並んでいるから目立つというのもあったが、それ以上に目立つ理由があったのだ。

しまった、と私は臍を噛む。

すっかり忘れていたが、この二人美形なのである。

しかも、どう見ても日本人には見えない。

お正月でひきこもり気味、顔をあわせるのはたまに買出しに行くコンビニの店員のおにーちゃん（またはお姉さん）の他はこの二人だけだったので、感覚がすっかり麻痺していた。

信じがたいことだが、世間一般の基準に照らし合わせてみたらこの二人、極上の美形と言うやつだった。

せめてひとりだけならまだしも、二人。

中身がアニオタの魔王と宇宙人などと他の人には知りようがない。

他人にとっては良い観賞用のオトコ二人。

視線がイタイ。側にいる私にまで視線が飛んでくる。

そりゃそうだ、この二人と私では見た目のスペックが違いすぎる。どういう関係か気になっても仕方ないだろう。

「フオン、どうしたんだ？何か買いに来たのだろう？」

「お正月用品のコーナーありましたよ、あちらじゃないですか？」

二人から少し距離をとろうとしたら、見つかってしまった。

「フオン！？」

呼ばないで、お願い！という私が飛ばした念というか電波を、この宇宙人は受信してくれなかったらしい。

使えない宇宙人だ。

「そっちじゃないですよ、こちらです」

笑顔で私の腕を引いて、目的のコーナーまで案内してくれた。

ああ、周りの皆さんの視線が痛い。

「玩具を探すんですよ」

「大人のおもちゃ、というと卑猥でいいな」

それなのに空気を読まないこの魔王の発言。

「黙れ」

手にした羽子板で二人を殴りたい衝動に駆られたが、POSを通す前だったので自重した。

くつ、命拾いをしたな、二人とも！

「羽と羽子板、コマと紐、めんこ、あと歌留多。花札も買うか。麻雀なら家にあるけど3人じゃねえ」

サンマしかできない麻雀なんて麻雀ではない。

二人、ないし3人で遊べるお正月の遊びといえばこれくらいだろう。

「あ、花札知ってます。負けたら一枚づつ脱いで行くんですよ！ぱつと顔を輝かせて、宇宙人が偏った知識を披露した。

「何そのエロゲ展開！」

「CPUが強くて、結局勝てないんですよ……」

「お前もか。わたしも何度かやってみたのだが、最後の1枚は絶対脱がないんだ……」

「そうなんですよね、何度も挑戦して見ましたが、やりすぎてフォンのマウスが壊れてしまいました。あ、マウスってここでも売ってますか？トラックポイントだとしんどくて」

「……… 新年明けそうそう、マウスの調子がおかしいと思ったら貴様らのせいか。」

確かに私のパソコンは自由に使っていいといったが、エロゲをインストールしてもいいといった覚えはない。

5・三が日終了 【後編】

どうも、彼らの学習能力は妙な方向に発揮されていたらしい。
うかつだった。

「……………花札、ルールを教えなきゃいけないかと思ったけど、その必要はなさそうね」

教えるとなると大変だなと思っていたのだが、私の知らぬ間に学習していたようだし？ エロゲーで。

なんとという破廉恥な二人だろう。おまえたちが絶世の美形だなんて、世の皆さんに謝れ！

「あ、一通りなら調べましたから大丈夫です。こいこいでもおいちよかぶでも花あわせでも」

「わたしも大丈夫だ。それじゃ花札からやるか？」

「ええ、そうしましょう。勿論、罰ゲームつきですよ、フォン？

……………フォン？泣いているのですか？」

「……………笑っているのよ」

ふふふふふ。

私を本気にさせるのがお上手なこと。

悪いが花札には自信がある。

自慢じゃないが100戦やったら99勝ぐらい朝飯前だ。

カードの引きが異常に良いのだ。

その為、知っている身内は花札で私に勝負を挑もうなんて考えないくらいである。

「罰ゲームつきで、やりましょう？」

私はふんわりと微笑んだ。

日付はすでに変わっている。

「フォン、これ何時までやればいいんですかつ!!」

「そろそろ疲れてきたんだが、まだか!？」

「まだ!!」

私は一人ベットで寛ぎながら、読書中。

男ふたりは下着一枚で逆立ち中。

下着一枚なので危険なゾーンが見えそうだが、そこは視線を逸らすことに対応。

男友達が少なくないせいで、下着くらいなら見慣れている。

「一晩ずっとそうしてなさい」

多分、死にはしないだろう。

「寒いです、フォン」

「暖房の温度をあげてくれ」

「ダメ」

「……頭に血が登ってきました」

「くらくらするな」

二人の顔は大分赤黒くなっている。

そりゃ、数時間そんなことをしていればそうなくてもおかしくはない。

一応、確認はしたのだ。魔王のHPと宇宙人のHPについても。

どのくらいで死ぬのかどうか。

一応、地球の法律に照らし合わせれば犯罪ではないかもしれないなあ、とは思っているが何かあったらやっぱり気まずい。

限界は一応把握しておくべきだと思い、うまいこと聞き出しておいた。

彼らの回答だが、魔王曰く勇者の必殺技でも無い限り死にはしないそうだし、宇宙人にしても蘇生回復技術はめざましいらしく、そう簡単には死なないとのことだった。

だから気にしない。大丈夫、大丈夫。

「明日は、羽子板しましょうね！」

明日というかもう今日か。

日付変更は過ぎているのだから。

なんだかあつという間の三日間だった。

「明日、明日ですか……」

若干虚ろになった目でヤマシイが呟いた。

なんだ、明日というのが不満とでも？

確かに、お正月といえば3日間のことを大体さすものだが、一日くらいオーバーしたところで構いはしないだろうに。

せっかく買ったんだし。コマも歌留多もあるのだから、遊ばなくては損だ。

明日こそお正月らしい遊びを堪能しよう。

羽子板だけでなく、書初めの時に使った墨も筆もある。羽根つきと言えば、罰ゲームで顔に落書きが基本だ。

由緒正しい罰ゲームの行使が楽しみだった。
勿論写真撮影のオプション付きで。

「明日。……一晩逆立ちし続けた後に羽根付きとやらができるのだろうか。フォンはドSだな。しかしたまにはこういうプレイも悪くはな」

魔王の世迷言を全て言わせる前に、気づいたら右手が動いていた。

ああ、私の本！

「酷い、一撃で伸びてます……ああ、あんな所に当てるなんて！」

まあ、下着一枚で逆立ちしていたら、当たりやすい位置にあんなものがあつたわけで。

私は、悪くない。

「何か不満でも？」

「い、イエ……」

小刻みに震えながら逆立ちを続けるという器用なことをしている宇宙人ヤマシイは、さっと私から視線をそらした。

6・一夜明けて

黒っぽい塊が足元に二つ、ごろりと転がっていた。

「根性なしどもめ……！ この程度か！」

高らかに笑う私に、眼下の塊がぴくりと反応した。

「フォンが強すぎるんですよ……」

「ハンデを付けて貰えばよかった！ 勝負事になると、なぜそんなに強いのだ」

二つの塊はそれぞれ宇宙人のヤマシイと魔王様ターナだ。

耳なし芳一もかくやとばかり、全身余す所なく墨が這っている為、まるで黒い塊のように見えるが、間違いなく元は美美的イキモノだった。

『元』は。

現在は黒っぽくて小汚い為、素を想像するのが残念ながら難しい。一面黒一色ではなく、所々元の地の色がのぞいている為、余計に無残な有様である。

よくよく見ると、ただ塗りたくっているのではなく、それは「痴漢」という文字であつたり「変態」という文字であつたり、「色魔」という文字が書かれているのだとわかる。

人間やればできるものである。筆の限界に挑んでみた。新世界を見つけてしまった気持ちである。

隙間という隙間に書き込んである為、遠目から見ればおそらく全身真っ黒な塊に見えるのではないだろうか。

彼らは、『お正月だよ、全員集合！フォンさんと羽根付き大会』という企画（勿論主催は榊芙蓉、つまりは私である）に参加し、敗北した者達である。

羽根付き大会といえば、負けたら墨で落書きがつきもの。
書初で使った墨を全身全霊ですり倒し、迎え撃つ準備は万端だった。

背後から、

『フォンが、なんだか怖い……』という発言が聞こえてきた気がするが、きつと空耳に違いないと無視させていたのだ。

「さて、いざ尋常に勝負！」

と簡単にルールを説明した後二人と羽根付きをした。

しかし、味も素っ気もなく、勝敗がついてしまったのだ。
あっけなさすぎる。

流石にはじめの一回二回は慣れないことであるし、罰ゲームは免除していた。

暫く慣れるまでは手心も必要だと思ったのだ。

それも3回を超えたあたりから、彼ら自身が罰ゲーム免除は不要
と言いつつ出した為、罰ゲームもつけることにした。

目の周りに。x。ちよび髭。猫ヒゲ。皺。怒りマーク。

羽根突きの罰ゲームといえばまさにこれだろう。

思いつままに筆を振るうことにする。

芸術は爆発だ、と言ったのはかの有名な芸術家だが、これも芸術
のうちに数えてよいのだろうか？

そうして、初めの頃は、オーソドックスな模様を書いていたのだ
が、やがてネタが尽きた。

彼らが弱すぎるのだ。

全戦全勝する私と、全敗の彼ら。

ネタはつきても不思議はなかったが、勝負はまだ続いていたので、
途中から彼らにふさわしい称号を思いつまま書き連ねることにした。

変態や色魔などがそれだ。

あまりにもふさわしい称号で彼らも悦んでいることだろうと思う。もう、書くスペースがそろそろ見つからないなあを思ってきたところで、ほぼ黒い塊になりつつあった男二人が力尽きたように崩れ落ちた。

「なんだ、だらしない……」

確かに、私は罰ゲームや報奨のかかった勝負事となると何故か燃える質で、常以上の力を出せるし、疲れ知らず（ただし後でその反動が来る）ではあるが。

仮にも彼らは魔王と宇宙人。紛うことなき地球外生命体である。すなわち、地球人の枠の外にいる存在のはず。

まあ宇宙人であるヤマシイの身体能力が地球人と然程変わらないとしても、仕方ない。

しかし、ターナのほうはどうだ。人間などを恐怖に陥れる存在のはずじゃないのか。

なっていない、魔王としてなっていない。

これが地球を侵略する魔王なのだとしたら、一から出なおせと指導したいところだ。

手応えがなさすぎる。

昨日は不幸な事故でターナが逆立ちを中断するに至ったため、公平にヤマシイの逆立ちも一晚と言わず、途中で止めさせたのだし、睡眠時間は十分二人とも取れているはずなのに。

……それとも、寝すぎで頭がまだ寝ぼけてるとか？

「昨日は存分に寝かせてあげたはずなのに、まだ足りないのー？それとも寝すぎたの？」

全く、宇宙人や魔王の飼育方法が書かれた本は無いものか。

私が先駆者な為、自分で試行錯誤するしか無い。

彼らと言葉で意思の疎通が図れるだけ、動物よりは楽なのだろうけれど。

「え……昨夜は寝かせてあげたというか、フォンが強制的に意識を刈り取ったんじゃない……あ、いいえ、僕の気のせいでしたっ！だからその羽子板は僕に向けないでください。羽子板は羽をつくためのものですよー！」

悲鳴じみた声をヤマシイが上げる。

失礼な。私がまるで乱暴したみたいに。

安らかに眠れるよう手伝ってあげただけじゃないの、ねえ？

ぺしり、と羽子板を軽く叩けば、二人が揃って体を強ばらせた。

「ええと、その……睡眠時間の多少の問題ではないと思います」

視線を微妙にそらしながら、ヤマシイ。

「じゃあ、どうして」

「た、単に僕達が不甲斐ないだけです。ですよね、ターナ」

「ああ、修行不足ってやつだな多分きつとおそらく……」

何故かターナが棒読みで言った。

「フォンさんを満足させられなくて、僕達としても不本意なのですが……羽つきはもう十分堪能しましたし、そろそろ、他の遊びをしませんか？」

「その有様で？」

「あ、いえ。体を余り使わないものでお願いします。それと、少し休憩時間をください」

「注文が多いわね」

「お願いします」

「いいけど……」

私も少し疲れたし。

よいしょ、と床に転がるターナを椅子にして座った。

ぐえ、とつめき声が上がった気がするが、これは単なるBGMである。

気にはしていない。

「30分後に、こま回しでもしようか」

歌留多はちよつとかつたるい。

「コマ、ですか」

何故かターナ（返事が無い、只の屍のようだ）を羨ましそうに見ながら、ヤマシイが言った。

「そう。遊び方わかる？」

「回すんですよね？」

「そうそう。えーとね……コマに紐をぐるぐるとまきつけるでしょ。それを、」

どうやって説明しようか、と悩んだところで丁度いいものがない浮かんだ。

「お代官様が町娘をアーレーって言って回すところみたことある？あの要領で紐を引くの」

「ああ、わかりました！」

思い当たったらしく顔を輝かせるヤマシイを見ながら、私は「ん？」と首をかしげた。

あれ、ひょっとして私……彼らに毒されてきてるかもしれない、とか？

いやいや、まさか！

ぶんぶんと首を振って脳裏に過ぎった考えを否定した。

「そうです、フォン！名案を思いつきました」

「……はい？」

頭を振って考えを振り落とすのに夢中になっていた為、一瞬、反応が遅れた。

「筆プレイはできませんでしたが、こま回しでコマの代わりにフォンが回るのはどうですか？キモノを着て帯を巻いて下さればですね。私とターナが引いて……」

私は、明らかに例え話を間違えたらしい。朱に交わってしま
っては駄目だ。赤く、いや桃色になってしまふ。反省しよう。

明日から、気を引き締めて心を入れ替えなければ。

「コマ回し、やめよう」

「え、何故ですか」

「紐をひくとか体を使うと思うの。ほら、引くときに腕を動かす必
要があるじゃない。その点、紐なしバンジーは最近のトレンドだと思
うの。何もしないで只落ちればいいだけだから。私は遠慮してお
くけど、ヤマシイとターナにオススメ」

にっこりと微笑む私と対照的に、男二人は顔色を真っ青に染め上
げた。

翌日。マンションの屋上から男二人の絶叫が響いた、という苦情
は今のところ私の元には届いていないことだけは報告しておく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5906m/>

地図にない楽園

2010年10月8日14時00分発行